

ピアノの普及と大阪の都市形成
——三木楽器の帳簿（1902-1940）の調査に基づいて——

齊藤紀子*

The Diffusion of the Piano and Urbanization in Ōsaka:
Research on Sales Records of Miki-Gakki Company

SAITO Noriko

Abstract

Miki-Gakki, one of the most important Japanese musical companies, held account books of 3700 pianoforte consumers (1902-1940). In this paper I investigate these books and analyze their data of regions where pianos were purchased.

This company sold a lot of pianos for the customers in the Western part of Japan as well as Tokyo. I suggest two reasons for this trade. First, Miki-Gakki had the monopoly in Western Japan for Japanese reed organ, and secondly it was established as a publisher. As a result, many pianos were delivered to three main cities in Japan, Ōsaka, Kyōto, and Tokyo.

Miki-Gakki is located at the center of Ōsaka. Two aspects can be clarified about the diffusion of pianos in Ōsaka. First, a lot of consumers of pianos were converged in Ōsaka city where served as a central function of the commerce, industry and traffic network. Especially the main district of Ōsaka city and Tennoji Ward were prominent in terms of the number of data. Secondly, several pianos were purchased in the suburbs of Ōsaka city, for example, Semboku and Settu area, which developed as emergent residential areas with private railways.

Therefore the diffusion of piano almost corresponded with the urbanization in Ōsaka.

Keywords: The diffusion of piano, Miki-Gakki Company (musical instrumental dealer), the first half of the 20th century, Ōsaka-Prefecture, urbanization

1. 研究の背景

1-1. はじめに

ピアノは、コンサートホールや教育機関、ホテルなど人の集まる多様な場に備え付けられている。本研究は、このようにある種の汎用性をもつピアノについて、三木楽器が本社社屋に保管するピアノの納入に関する帳簿を研究対象とし、ピアノの普及状況と大阪の都市形成との関わりについて明らかにすることを目的に、納入地域と納入施設というピアノをめぐる二種類の場に焦点をあてて考察する。研究方法は、帳簿の分析である（分析データの最終更新は2014年8月31日に行った）。分析にあたり、データベースソフトウェア「FileMaker Pro11」を用いて帳簿のデータファイルを作成した。

洋楽受容史のこれまでの研究では、ピアノの普及について、主として音楽教育（津上 2010）や演奏会の上演

キーワード：ピアノの普及、三木楽器、20世紀前半、大阪府、都市形成

*平成21年度生 比較社会文化学専攻

状況（塩津 2012）について論じられ、学校（武石 2009）や百貨店（玉川 1997）などピアノを消費する立場にある資料をもとに考察されてきた。とりわけ、関西圏の音楽文化についてはそうした研究が多く蓄積されている。たとえば、塩津は、所属する大阪音楽大学が保管する資料をはじめ、同大学の音楽文化研究所が発行した『大阪音楽文化史資料』（大阪音楽大学音楽文化研究所（編）1968；1970）をもとに数多くの論文を発表している。なかでも、「明治期関西洋琴事情」（塩津 1994）は本研究のテーマと密接な関わりがある。また、時田も「戦前の関西におけるピアノ：近代のシンボル」（時田 2013）のなかでピアノの位置づけを示している。

ピアノの普及に限定せずに、日本の西洋音楽受容としてより広い視野でみると、通信教育から音楽の普及状況を考察した上野の研究（上野 2010）は、音楽を供給する立場からみた資料に基づく点で、本研究と同様の視点を設定しているといえる。しかし、ピアノの普及についていえば、このような視点から考察を試みた研究は、管見の限りではなかった。そこで、本稿では、三木楽器というピアノを供給する立場にある楽器商の帳簿に基づいて、ピアノの普及状況と市街地や郊外の形成過程との関係を明らかにすることを目的とし、まず、三木楽器がピアノを納入した地域・施設の全容を概観したうえで、三木楽器が創業した地であり、最も多くのピアノが納入された大阪府内の納入事例を具体的に示していく。

1-2. 三木楽器の沿革

三木楽器は、金融街である淀屋橋と繁華街の心齋橋に挟まれた大阪の中心地（大阪市中央区北久宝寺町）に位置する楽器商である。「三木楽器」という社名が正式に登録されたのは1956年のことであるが、楽器の販売は半世紀以上先立つ1888年から始められている。そして、1990年に『鉄道唱歌』を出版（大和田健樹作歌、多梅稚作曲）した他、1921年からスタインウェイ社Steinwayのピアノを総代理店として日本で初めて輸入し、1925年には音楽学習教材『コールユープンゲン Chorübungen』の翻訳出版権を日本で初めて取得するなど、楽器販売や音楽書籍の出版を通して日本の西洋音楽受容史に重要な足跡を残してきた¹。

三木楽器の前身、河内屋佐助（本姓三木家）は、1825年に大坂本屋仲間に加わった書林である（大阪府立中之島図書館（編）1977、第三巻 461）。三木楽器の楽器販売は、河内屋佐助に楽器部が創設され、風琴（リードオルガン）の販売を始めたことに由来する（三木 1902、下 77）。楽器部創設を手がけた四代目主人三木佐助（1852-1925）は、五十路を迎えたことを機に自らの身上と見聞を語った『玉淵叢話』を纏めており、その中で楽器部創設の経緯も語っている。それによると、共益商社の社長で三木佐助の知人にあたる白井練一の紹介状を携え、ヤマハの創業者である山葉寅楠（本名山羽寅楠）が三木佐助のもとを訪れたのを機に、山葉が製作した風琴を販売したことが、河内屋佐助の楽器販売の始まりである（三木 1902、下 77）。なお、1898年に12万円の資本金をもとに日本楽器製造（社長に山葉寅楠が就任）が創業した際に、三木佐助は株式の20分の1を保有し、監査役に就任している（三木 1902、下 82）。

河内屋佐助は、楽器部創設に先立ち、1880年代に各教科に関する書籍を数多く出版しており、とりわけ、楽器部開設の前年にあたる1887年以降は音楽教育関連書籍を核に据えた出版へと推移していた。楽器の販売に着手する前から、出版文化や学校教育と深い関わりがあったことが、三木楽器の一つの大きな特徴であるといえる。また、楽器部の他にも籐商部（三木 1902、下 72-76）や農業部（三木 1902、下 90-119）、茶業部（三木 1902、下 85-90）が設けられるなど、河内屋佐助の取扱品目は多岐にわたっていた。

1-3. 三木楽器のピアノの納入に関する帳簿

三木楽器は、ピアノの納入について記録した帳簿を二冊保管している。一冊は、1902年から1928年までの記録で、国内で製造され、1903年から1928年にかけて販売された2624台のピアノについて記載された前半部分と、海外で製造され、1902年から1924年にかけて販売された741台のピアノについて記載された後半部分に分けられているが、国産品と輸入品の区別には若干の混合がみられる。もう一冊は、海外で製造されたピアノを中心に、1918年から1940年にかけて販売された335台のピアノについて記録されている。二冊の帳簿を合わせると3700台のピアノの販売について記録されていることになるが、これらのデータを時系列に沿って並べかえたところ、重複している記載や購入を取消された事例もあり、実際には、3676台のピアノが消費者のもとに納入されていたことになった。また、国産ピアノの納入記録と輸入ピアノの納入記録が揃うのは1903年から1928年までの約25年

間である。以下、記載事項の重複や記録されている時期の重なりを考慮し、この二冊の帳簿を合わせて作成したファイルデータを『ピアノ納入簿』として考察していく。

『ピアノ納入簿』は、これまで、その詳細なデータが顧みられることがなかった。三木楽器の作成した納入台数の編年変化を示す表(手稿)の写しが『大阪音楽文化史資料明治・大正編』に掲載されている(大阪音楽大学音楽文化研究所(編)1968、130-131ページ間の折込部)が、『ピアノ納入簿』のデータをもとに整理したところ、三木楽器の作成した表にはデータを重複して計上しているところがあると思われ、誤りがあることがわかった。

記載された項目は、二冊で若干の差異がある。二つの部分に分けられている帳簿には、「發送日付」、「種別型番号」、「売渡金額(楽器代價、荷造費)」、「宛名」、「住所」、「摘要」が、もう一冊には、「傳票日付」、「納入先(住所)」、「摘要」、「取次店名」が記録された。各項目の記入欄は必ずしもすべてが埋められているわけではなく、取引回数が多い納入先や三木楽器の近辺への納入の中には、住所が略記・省略されていることもある。また、筆跡から、記録には複数の人物が関与したと考えられる。社外への公表を目的とせず記録・保管されてきたこの帳簿には、そうした点においては記録の質に一貫性を認めることができないが、これまで、主としてピアノを消費する立場から提供された資料をもとに論じられてきた洋楽受容史に対し、楽器商というピアノを供給する立場から提供され、時期・地域ともに広がりをもったデータをもとに、大正時代を中心に明治末から昭和初期にかけての戦前の日本のピアノの需要と供給という流れについて様々な観点から明らかにすることができる点において、高い史料価値があるといえる。そこで、可能な限り補筆(たとえば、所在地の記載が省略されたケースの内、教育機関への納入などその名称から所在地を特定できるものについて補筆)をしたうえで分析を実施する。

2. 『ピアノ納入簿』にみる納入地域と納入施設の全容

本章では、販売台数の編年変化を示し、納入地域と納入施設という二つの観点から『ピアノ納入簿』を概観する。

まず、販売台数の編年変化を図1に示す。

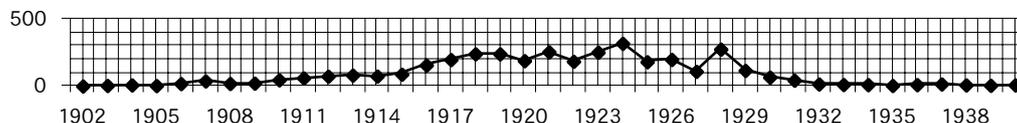


図1 三木楽器の『ピアノ納入簿』にみる販売台数の編年変化(1902-1940)(齊藤作成)

このグラフから、三木楽器の年間のピアノの販売台数は、1910年代末から100台を超えるようになったことがわかる。1920年代にピアノの需要が高まったが、1930年代に入ると、20世紀初頭と同じくらいの販売台数にまで下降する。ただし、前述の通り、国産ピアノの納入記録と輸入ピアノの納入記録が揃うのは1903年から1928年までの約25年間であるため、このグラフが示すほど納入台数が激減したとは考えにくい。三木楽器に対するピアノの需要は、遅くとも、大正時代(1912-1926)後半に高まっていたといえる。

これらのピアノは、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本の各国で製造された。メーカーを特定できる1814台の中ではドイツのスタインウェイ(592台)²やフォイリッヒFeurich(684台)、ローゼンクランツRosenkranz(271台)と日本楽器製造(現ヤマハ、100台)が多くみられる。全体の半数以上がアップライトピアノ(2585台)でグランドピアノは2割程度(841台)の普及率であった。自動ピアノも152台納入されている。

2-1. 三木楽器のピアノの納入地域について

三木楽器は、日本国内の各地と歴史上日本と関わりのあった地域も含め、今日の「海外」の地域にピアノを納入している。表1に、その全容を日本国内は都道府県別に「海外」は国別にし、納入件数の多い順かつ五十音順に示す。なお、取次商を介した納入については、必ずしも、取次商の所在地と同一の都道府県内に納入されていないことから、最終的な納入先を特定できない事例の内、取次商を介したケースについては「(取次商)不明」

表1 『ピアノ納入簿』にみる納入地域の全容（齊藤作成）

都道府県・国名	大阪	兵庫	京都	東京	福岡	奈良	広島	香川	滋賀	
台数	797	194	83	78	61	45	42	29	28	
和歌山	鳥取	岡山	山口	愛知	台湾	フィリピン共和国	長崎	愛媛	大分	
24	23	22	22	19	19	19	16	15	15	
鹿児島	朝鮮	三重	熊本	長野	中華人民共和国	佐賀	宮崎	島根	福井	
13	13	13	11	11	10	8	8	7	7	
北海道	沖縄	岐阜	宮城	徳島	富山	神奈川	高知	静岡	福島	青森
6	5	5	5	4	4	3	3	3	3	1
秋田	石川	栃木	新潟	ロシア	（取次商）不明		国内不明	納入国不明		
1	1	1	1	1	1701		257	19		

とした。ただし、海外に所在する取次商についてはその所在国に含めて計上している。

この表から、三木楽器のピアノは、大阪府の隣県を中心とする西日本各地と東京都に集中して納入されていたことがわかる。この背景には、楽器部創設当初は山葉製風琴の西日本専売権を有していたこと、そして、書林河内屋佐助として創始した経緯から、書林の三都（京都、大阪、江戸）とのつながりが築かれていたことが考えられる。

また、「海外」の納入事例をより詳しくみると、フィリピン共和国への納入はすべてアメリカ占領下のマニラ市内に、台湾（当時、日本統治下）への納入は台北（5台）と台中（6台）、台南（7台）の他、所在地不明の事例が1台あった。朝鮮（当時、日本統治下）への納入は大韓民国のソウル（6台）や釜山（2台）と朝鮮民主主義人民共和国の咸興（1台）、清津（1台）の他、所在地不明の事例が3台あり、中華人民共和国への納入は天津（8台）と満州（1台）の他、所在地不明の事例が1台あった。このように、「海外」に分類した地域の中には、三木楽器がピアノを納入した当時、日本統治下にあった場所もある。国名の表記については、以下、大阪府の納入状況をみていく際に、今日の区分に従うと同様に、現行の名称を用いている。

次に、「（取次商）不明」となる事例について、その所在地の内訳を表2に示す。

この表から、納入地が不明となる取次商の所在地もまた、西日本各地と書林の三都に集中していることがわかる。

表2 「（取次商）不明」となる取次商の所在地の内訳（齊藤作成）

都道府県名	兵庫	京都	東京	大阪	愛知	福岡	広島	岡山	北海道	
台数	492	297	200	131	127	78	40	30	28	
熊本	山口	長崎	宮崎	鳥取	大分	高知	福井	鹿児島	徳島	香川
26	23	17	17	16	16	13	12	12	11	10
長野	三重	奈良	佐賀	和歌山	島根	沖縄	愛媛	石川	静岡	不明
9	8	8	7	6	5	5	2	1	1	53

2-2. 三木楽器のピアノの納入施設について

三木楽器がピアノを納入した施設について、個人、教育機関、企業・商店、娯楽施設、放送局、医療機関、官公庁・役場、団体、宗教施設、取次、不明の11種類に分類した。その結果を表3に示す。なお、取次には、取次

表3 三木楽器のピアノの納入施設の全容（齊藤作成）

種別	個人	教育機関	企業・商店	娯楽施設	放送局	医療機関	官公庁・役場	団体	宗教施設	取次	不明
台数	1081	649	91	35	13	10	9	5	3	1768	12

商を介した事例の内、最終的な納入先を特定することのできないケースが該当する。

最終的な納入先が判明しない取次商を介した事例が全体の約半数を占めている。納入先を追跡できるケースも含めると、取次商を介した事例は2081件となる。消費者への直接販売のみならず、こうした取次商への納入を行っていたことが、三木楽器のピアノの販売の一つの大きな特徴であり、そうした商店の存在が一定の需要の確保に大きく寄与したことがわかる。

納入先を特定できる事例の中では、その半数以上が個人あてに納入されており、それに次いで、教育機関への納入が目立つ。教育機関への納入は、小学校（318台）、女学校ならびに高等女学校（188台）、師範学校（58台）と唱歌や器楽が教育課程に組み込まれている学校種への納入事例が顕著にみられ、幼稚園（28台）や東京芸術大学の前身である東京音楽学校（28台）をはじめとするその他の教育機関³、中学校（11台）にも納入されていた。企業・商店へ分類した事例には、今日の著名な企業から、どのような商品を取り扱っていたのか判別できない個人の商店まで、規模・業種ともに多様な事例が含まれている。企業と商店とを厳密に区別することが不可能であったため、この表では一括りにして分類することとした。いくつかの例を挙げると、朝日新聞社や大阪ガス、倉敷紡績、島津製作所、東洋紡績などがある。娯楽施設への納入事例には、松竹や宝塚の劇場、ピヤホールやカフェなどの飲食店、客船やホテルなどが挙げられる。放送局は日本放送協会（NHK）放送局への納入事例で、大阪（6台）を中心とし、岡山県・静岡県・東京都・島根県・長野県・広島県に開局と前後して納入されている。官公庁・役場への納入事例には、宮内省をはじめ、京都府・島根県・奈良県・広島県内の役場があった。また、宗教施設への納入は、奈良県の桜井教会、福岡県のバプテスト教会、和歌山県の高野山大師教会への納入を計上している。

ピアノの納入施設には多様な場が挙げられるが、音楽の演奏を主たる目的とするコンサートホールへの納入はみられないことがわかる⁴。

3. 大阪府内への納入事例

本章では、『ピアノ納入簿』のなかで最も納入台数の多かった大阪府内の事例をもとに、ピアノの普及していた地域の特徴を考察する。

3-1. 大阪府内各市町村へのピアノの納入

まず、大阪府内へのピアノの納入の全容について、各市町村への納入台数を表4に示す。各市町村名は、2014年現在の区分に従っている。これは、『ピアノ納入簿』が記録される間に大阪市の市域拡張をはじめ、市町村の区分が幾度か変更されていることを考慮し、現行の区分に従って分類することで統一を図ることとしたためである。たとえば、大阪市は1889年に市政が施行されたが、その後、1897年の第一次市域拡張、1925年の第二次市域拡張に伴い周辺地域を併合しながら規模を拡大してきた。その後も改編を繰り返し、1989年から現在の区割となっている。

ピアノは、大阪府庁舎があり、三木楽器の所在地でもある大阪府に集中して納入された。その他の地域としては、大阪府に隣接する泉北地域（堺市、泉大津市、高石市、忠岡町の計45台）と摂津地域（高槻市、茨木市、吹田市、豊中市、池田市、箕面市の計40台）への納入が目立つ。そこで、大阪府、泉北、摂津の3つの地域について詳しくみていく。

表4 大阪府内各市町村へのピアノの納入（齊藤作成）

市町村名	大阪市	堺市	豊中市	岸和田市	池田市	高石市	東大阪市	箕面市
台数	646	34	14	13	12	8	7	7
八尾市	茨木市	泉大津市	吹田市	高槻市	富田林市	交野市	泉南郡田尻町	
4	3	2	2	2	2	1	1	
泉北郡忠岡町	大東市	枚方市	南河内郡 ※町村名不明	不明				
1	1	1	1	35				

3-2. 大阪市内の納入事例

大阪市内の納入について、まず、市内各区の納入台数を表5に示す。表4の市区町村名と同様に、2014年現在の区分に従って分類した。

表5 大阪市内各区へのピアノの納入（齊藤作成）

区名	中央	天王寺	西	北	西成	住吉	浪速	阿倍野	福島	生野	港
台数	124	88	78	73	29	27	23	21	18	9	7
淀川	大正	此花	都島	旭	城東	東淀川	住之江	鶴見	平野	不明	
7	6	5	5	2	2	2	1	1	1	117	

この表から、区名を特定できない事例も多いが、全体の半数以上（365台）が三木楽器のある大阪市中央区とそこに隣接する天王寺区、西区、北区に納入されていたことがわかる。これらの四区は、天王寺区を除き、大阪市の市政が施行された時の市域とほぼ一致する。大阪市の成立にあたって、旧大阪四大組（東大組、南大組、西大組、北大組）が再編成され、東大組と南大組が中央区に、西大組が西区に、北大組が北区となった。天王寺区は、初代大阪市中央区の南方に位置し、大阪市の市政施行時には、大阪市内に含まれず、天王寺村と呼ばれていた。

これら四区への納入状況をみるために、表6に納入施設の種別を示す。

表6 中央区、天王寺区、西区、北区内の納入施設（齊藤作成）

	個人	教育機関	企業・商店	娯楽施設	放送局	医療機関	団体	不明
中央区	62	36	13	7	4	1	1	0
天王寺区	62	25	0	0	1	0	0	0
西区	33	37	3	2	0	1	0	2
北区	34	34	2	1	0	1	0	1

各区の納入事例のうち、個人の次に台数の多い教育機関への納入について詳しくみていくと、四区共に、半数以上（中央区28台、天王寺区13台、西区22台、北区22台）が小学校への納入事例であることがわかる。これらはすべて市立小学校への納入事例であった。女学校ならびに高等（女）学校への納入は、府立学校、市立学校への事例が多いが、中央区の相愛女学校（現相愛高等学校）や天王寺区の天王寺女学校（現四天王寺高等学校）、北区の金蘭会高等女学校（現金蘭会高等学校）、梅花高等女学校（現梅花高等学校）など私立学校への納入事例もある。師範学校は天王寺区内、幼稚園は西区内の納入事例が多い。また、これら四区に関していえば、中学校への納入事例を確認することができなかった。その他に、中央区内の大阪音楽学校（現大阪音楽大学）や大阪薬学専門学校（現大阪大学）、西区内の大阪府立聾口語学校への納入事例があった。なかでも、大阪音楽学校の創業者永井幸次は、大阪の音楽界に深く貢献した人物であるが、自身も三木楽器からピアノを購入している。そして、「永井氏周旋」や「永井先生周旋」と付記されている納入事例があることから、永井がピアノの販売店として三

木楽器を紹介していたことがわかる。

続いて、これら四区のなかでも特にどの地域に集中して納入されているかを示す。なお、以下の結果は、住所表記をもとに現在の住所表記と最寄駅を割り出す過程を経て得たものである。

中央区は、日本で最初の都市である難波宮から、近世の大坂城築城を経て今日に至る長い歴史をもち、証券、業、卸商などの経済活動が活発に展開され、大阪府庁がある⁵。まさしく、大阪府ならびに大阪市の中心であるといえる。中央区内は、三木楽器のある本町駅周辺に29台、淀屋橋駅周辺に15台、谷町四丁目駅周辺に14台、北浜駅・松屋町駅周辺に各9台、堺筋本町駅・心斎橋駅周辺に各8台、難波駅周辺に7台、天満橋駅・長堀橋駅周辺に各5台、谷町六丁目駅・日本橋駅周辺に各4台、玉造駅・森ノ宮駅周辺に各2台、大阪上本町駅周辺に1台納入された他、現住所を特定できない事例が2台あった。中央区内への納入の少なくとも半数が、三木楽器があり、問屋街と金融街の二つの機能を果たす船場地区（本町駅・淀屋橋駅・北浜駅・堺筋本町駅・心斎橋駅・長堀橋駅周辺の計74台）に納入されていたことがわかる。

天王寺区は、前述の通り、初代大阪市の市域には含まれていなかったが、第一次市域拡張に伴って大阪市に編入した。日本で初めて欧米諸国からの文物の展示を実施した第5回内国勸業博覧会が1903年に開催され、早期から大阪府師範学校（現大阪教育大学）をはじめとする教育機関や医療機関（大阪赤十字病院など）、動物園などを備えた住宅地として整備された。また、1889年に大阪鉄道（現JR西日本）が開業した天王寺駅は、ターミナルとして発展していった。天王寺区内は、四天王寺前夕陽ヶ丘駅周辺に29台、大阪上本町駅周辺に13台、桃谷駅周辺に11台、玉造駅周辺に10台、鶴橋駅・寺田町駅周辺に各5台、天王寺駅周辺に4台、谷町六丁目駅・谷町九丁目駅周辺に各2台納入された他、現住所を特定できない事例が7台あった。四天王寺や天王寺公園のある天王寺駅周辺の住宅地（四天王寺前夕陽ヶ丘駅・寺田町駅・天王寺駅周辺の計38台）とかつてのターミナル、大阪上本町駅周辺（同駅・桃谷駅・鶴橋駅・谷町九丁目駅周辺の計31台）に多くのピアノが納入されていたことがわかる。天王寺区内には、第7代大阪市長を務め、第二次市域拡張や大阪市営地下鉄御堂筋線の建設、大阪城天守閣の再建を手がけ「大大阪」の形成に貢献した関一や紡績業界に功績のある菊池恭三や山邊丈夫が居住し、三木楽器からピアノを購入している。

西区は、川口に外国人居留地が設置（1868-1899）されていたことから、大阪の西洋文化普及の中心地であった。船会社、倉庫会社、銀行等が競うようにビルディングを建設し、かつては、大阪府庁や大阪市役所があり、大阪市内の中核機能を担っていた。西区内は、阿波座駅周辺に27台、肥後橋駅周辺に15台、九条駅周辺に13台、西長堀駅周辺に11台、西大橋駅周辺に3台、桜川駅・汐見橋駅・大正駅・難波駅周辺に各2台納入された他、現住所を特定できない事例が1台あった。外国人居留地川口や大阪府庁・大阪市役所のあった江之子島に近い阿波座駅周辺（同駅・九条駅・西長堀駅・西大橋駅周辺の計54台）に多くのピアノが納入されていたことがわかる。

北区は、大阪の玄関口ともいえるターミナル駅、梅田駅が1874年に開業したこともあり、大阪の交通の中核を担っている。厳密にいうと、初代大阪市に含まれていたのは、現在の北区の南部という限られた地域であるが、北区内のピアノの納入事例は、梅田駅周辺に16台、中之島駅周辺に9台、天神橋筋六丁目駅周辺に7台、大阪天満宮駅・中津駅周辺に各6台、北新地駅周辺に5台、中崎町駅・南森町駅周辺に各4台、渡辺橋駅周辺に3台、京橋駅・桜ノ宮駅・天満駅・なにわ橋駅・福島駅周辺に各2台、東梅田駅・肥後橋駅・淀屋橋駅周辺に各1台納入された。梅田駅周辺を中心とする初代大阪市に組み込まれていた地域に多くのピアノが納入されていたことがわかる。

このように、大阪市中央区、天王寺区、西区、北区に納入されたピアノは、船場、天王寺と大阪上本町、阿波座、梅田といった地域に集中しており、各区の中核を担う地域に特にピアノが普及していたといえる。

3-3. 泉北・摂津地域への納入事例

続いて、大阪市の南方に位置する泉北地域と北方にある摂津地域への納入事例をみていく。泉北地域にあり、南大阪の中核的都市である堺市（1889年市政施行）には、計34台のピアノが納入されたが、その半数以上（20台）が個人あてに届けられた。他には、教育機関に12台、企業・商店と娯楽施設に1台ずつ納入されている。2006年に政令指定都市に指定された堺市は、現在、行政上7つの区に分けられているが、ピアノは、早期から市街地として整備された西区や堺市の中心部である堺区に集中して納入されている。

高石市（1966年市政施行）は、日本最古の公立公園とされる浜寺公園が開園した地である（厳密にいうと浜寺公園は高石市と堺市との上にまたがる）。高石市内に納入された8台のほぼすべて（7台）が個人あてに納入されているが、その内の2台は、伽羅橋園（洋風住宅地）を開発した山川逸郎が購入している。もう1台のピアノは小学校に納入された。高石市内のピアノは、高師浜駅、羽衣駅周辺に納入されている。

泉北地域には、他に、泉大津市（1942年市政施行）の個人と教育機関のもとに1台ずつ、忠岡町（1889年町村制施行）の1名の個人のもとにピアノが納入された。

また、難波を起点とする南海電鉄南海本線の沿線で、泉北地域の先に位置する岸和田市（1922年市政施行）は、城下町として発達し、明治以降は紡織工業都市として栄えたが、この地にも、個人のもとに11台のピアノが、教育機関に2台のピアノが届けられた。いずれも、南海本線の岸和田駅ならびに蛸地蔵駅の周辺に集中して納入されている。

続いて、摂津地域についてみていく。まず、摂津地域の中で最も多くのピアノが納入された豊中市（1936年市政施行）は、箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）の開通とともに形成された。豊中市に納入された14台のピアノの半数以上（10台）が個人のもとに納入され、残りのピアノは教育機関に届けられた。岡町駅、曾根駅、豊中駅周辺に納入されている。

池田市（1939年市政施行）は、阪急グループの本拠地であり、同社が手がけた池田室町の住宅地は、日本で最初の鉄道会社による住宅地開発として位置づけられている。阪急グループの創業者であり、宝塚歌劇の創始者として知られる小林一三もこの地に居住し、三木楽器からピアノを購入している。池田市内に納入された12台のピアノは教育機関と個人のもとへ、およそ半数ずつ（5台・7台）納入された。

豊中市と同様に箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）の開通とともに形成された箕面市（1956年市政施行）のピアノの納入事例はすべて個人のもとに届けられている。いわゆる高級住宅街として知られる桜井周辺に集中して納入されている。宝塚歌劇団や東宝劇団の上演活動に貢献した坪内士行もこの地に居住し、三木楽器からピアノを購入している。

摂津地域には、他に、茨木市（1948年市政施行）の教育機関に2台と個人消費者のもとに1台、吹田市（1940年市政施行）の教育機関と個人に1台ずつ、高槻市（1943年市政施行）の教育機関に2台のピアノが納入された。

これらの地域は、私鉄が敷設されるなど交通網が早期から発達していた。泉北地域には南海電鉄が1903年に難波・和歌山市間の路線を開通、摂津地域には箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）が1910年に梅田・宝塚間の路線を開通している。特に、阪急電鉄沿線は1905年に三宮・出入橋間の路線を開通した阪神電気鉄道沿線と共に、大正時代を中心に洋風文化が形成された「阪神間モダニズム」で知られているが、そうした大阪市の北方のみならず、泉北地域や岸和田市など南方の南海電鉄沿線にもピアノが普及していたことがわかる。

4. 結論

本論文では、『ピアノ納入簿』に基づき、ピアノの流過程に大阪の都市や郊外の形成を重ね、ピアノをめぐる都市や人びとの動向を明らかにしてきた。

三木楽器の所在地であり、最も多くのピアノが納入された大阪府内への納入をみていくと、大阪の経済・産業・流通の中枢を担う大阪市中央区とそこに隣接する天王寺区、西区、北区を中心に、泉北地域や摂津地域など20世紀初頭から住宅地や教育機関、医療機関と娯楽施設をはじめとする生活環境の整備と共に交通網が発達してきた阪急電鉄沿線や阪神電気鉄道、南海電鉄沿線地域にピアノが納入されていたことがわかる。このことから、三木楽器によってピアノが普及していく過程は、大阪の都市や郊外の形成過程とほぼ一致しているといえる。

『ピアノ納入簿』から読み取れることは広く深く、検討すべきことはまだ残されている。たとえば、個人への納入事例が多いことから、ピアノを置く場として住宅に注目し、日本の住宅史を調査したところ、洋式をとり入れた住宅プランの居間に度々ピアノが描かれていたことがわかった（齊藤 2014）。このように、『ピアノ納入簿』は、都市形成とピアノ、住宅（あるいは家庭）概念の形成とピアノなどピアノと社会の様々な関わり方を映し出すことによって、音楽学の多様な広がり示唆する史料であるといえる。『ピアノ納入簿』の考察を重ね、日本におけるピアノの普及過程について明らかにすると同時に、音楽学の新しいあり方を検討していくことを今後の

課題とする。

【註】

1. 三木楽器株式会社ウェブサイトの「沿革」(<http://www.miki.co.jp/company/history/index.html>)を参照した。
2. スタインウェイのピアノの製造工場はニューヨークにもあったが、三木楽器に保管されている書簡から、日本に普及した多くのスタインウェイのピアノと同様に、三木楽器がハンブルクの工場で製造されたピアノを販売していたことがわかった。
3. 他には、大阪府内の薬学専門学校(現大阪大学)、府立修徳館(感化院)、大阪音楽学校(現大阪音楽大学)、府立農学校(現大阪府立大学)、聾口語学校や熊本県の地方幼年学校(陸軍学校)への納入が挙げられる。
4. 日本で最初の洋楽専用コンサートホールは1880年に建造された東京音楽学校(現東京芸術大学)の奏楽堂(現旧東京音楽学校奏楽堂、現在改修工事中)とされている。1918年に大阪府の中之島に建造された大阪市中央公会堂には三木楽器もピアノを納入し、コンサートやオペラが上演されてきたが、講演会も開催されるため多目的集会施設として位置づけられている。
5. 大阪市中央区のウェブサイト(<http://www.city.osaka.lg.jp/chuo/category/92-5-0-0-0.html>)を参照した。以下、大阪府内の各市区町村についての記述は、すべて当該地区の公式サイトを参照している。

【参考文献一覧】

三木、佐助

1902 『玉淵叢話』大阪：玉淵堂(私家版)。

大阪府立中之島図書館(編)

1975-1993 『大坂本屋仲間記録』全十八巻(私家版)。

大阪音楽大学音楽文化研究所(編)

1968 『大阪音楽文化史資料(明治・大正編)』大阪音楽大学。

1970 『大阪音楽文化史資料(昭和編)』大阪音楽大学。

PALMIERI, Robert (ed.)

2003 *The Piano: An Encyclopedia* (2nd edition), New York: Routledge.

齊藤、紀子

2011 「河内屋佐助の楽器部創設について：『三木楽器』成立小史』『お茶の水音楽論集』13：60-65.

2013 「椅子式の居間におけるピアノについて：山本拙郎の住宅図譜『ピアノの漏るゝ家』(1922)を中心に』『お茶の水音楽論集』15：31-42.

2014 「大正・昭和初期の住宅におけるピアノの普及過程について：雑誌『住宅』の住宅プランにみるピアノの様相』『文化資源学』12：17-29.

新修大阪市史編纂委員会(編)

1988-1996 『新修大阪市史』本文編全10巻、大阪市。

塩津、洋子

1994 「明治期関西洋琴事情」『音楽研究』12：5-34.

2011 「明治期神戸のピアノ演奏記録」『音楽研究』26：41-65.

2012 「明治期神戸のピアノ演奏」『音楽研究』27：1-16.

武石、みどり

2009 「明治初期のピアノ：文部省購入楽器の資料と現存状況」『研究紀要(東京音楽大学)』33：1-21.

玉川、裕子

1997 「三越百貨店と音楽：音楽と商業は手に手をとって」『桐朋学園大学研究紀要』23：27-59.

時田、アリソン

2013 「戦前の関西におけるピアノ：近代のシンボル」『言語文化論叢』18：109-136.

津上、智実

2010 「神戸女学院音楽部レッスン帳(1907-1923)の史的価値とその内実」『神戸女学院大学論集』57(2)：141-153.

上野、正章

2010 「大正期の日本における通信教育による西洋音楽の普及について：大日本家庭音楽会の活動を中心に」『音楽学』56(2)：81-94.